

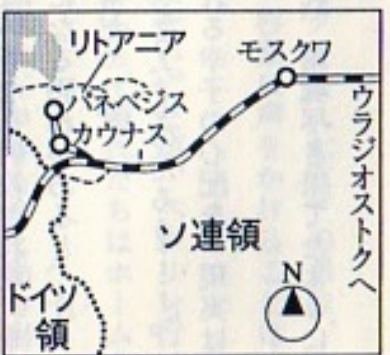
## 不安胸に若者先遣隊

大勢の若者が、薄暗い大部屋で話し合いを重ねていた。やがて、七人の男が立ち上がった。杉原ビザを手に、日本への脱出を試みるメンバーだった。

一九四一年二月、リトアニアの首都カウナスから九十キロ北の都市パネベジス。昔からユダヤ人が住むこの町には、多くのユダヤ難民が流入していた。

とりわけ、民族の故郷パレスチナへの脱出を願う、シオニストの若者が目立った。彼らはキブツ（共同生活体）をつくり、農作業や大工作業に励んでいた。

現在イスラエルで暮らすハイム・ゴッドヘルフ（七八）、アブラハム・ハゼ（七四）は、当時二十歳過ぎの青年。キャンデー工場で働いたり、鉄工場で子供の三輪車をつくっていた。日本通過ビザを手に入れた彼らだが、出国の問題が残っていた。リトアニアは前年、ソ連に併合されていた。ソ連は前々から、住民の出国にいい顔をしなかった。「社会主義に何の不满がある」という理屈だ。ユダヤ人は知っていた。その思想とは裏腹に、帝政ロシア時代から残る反ユダヤの土壌を。ポグロム（虐殺）はしばしば起きた。「反ソ的」の烙印を押され、シベリアで抑留生活を強いられた人間は数え切れない。



キブツ先遣隊の一人ハイムさん④  
は脱出当時



安全に出国できる方策はないのか。アブラハムたちは、杉原ビザを取ってなお半年をキブツで過ごし、知恵を絞ったが結論は出ない。集会室の百五十人の若者は決断した。「先遣隊を送り、どこまで行けるかやってみよう」

選ばれたのは、アブラハム、ハイムら七人だった。アブラハムは連日六十キロ歩き続けても平気な偉丈夫。ハイムは、疲れた仲間の仕事を真っ先に引き受ける世話好き。さらに、語学に強いモシエ、料理の得意なシユピツコフ……それぞれ特徴のある七人だった。

皆、まだ二十歳前後。世間を知らず、不安に満ちた旅立ちだったはずだ。だが、アブラハムは言う。「迫るナチの魔手を考えれば、ソ連を東へ横断するしかない」

ユダヤ難民がソ連を出国した例はすでにあった。カウナスの難民のリーダー、ゾラフ、バルハフティクたち。現在エルサレムに住み八十八歳になる彼は、ユダヤ教の最高幹部などを介してソ連当局に対し「難民をシベリアに送っても役には立ちません」と予防線を張



った。一方で、英国の有力ユダヤ人を通し、駐英ソ連大使を動かす。

「リストを出せ」という要求には「シベリア送りのワナでは」と悩んだ。結局、仲間に無断で七百人分を申請したが、全員の許可が下り、四〇年秋、彼らは日本に向けて出発した。

その知らせは、パネベジスのキブツにも伝わっていた。「許可は出してもらえないようだ」という希望的な観測と、「本当に出られるのか」という懐疑が、若者たちの心を乱した。

何より、ゾラフとアブラハムたちの間には決定的に違う点があった。ゾラフたちは、米ドルを調達していたが、キブツの貧しい若者ではソ連のルーブルしか用意できない。難民の間では「ドルでなければシベリア鉄道の切符は買えない」と言われていた。

「ルーブルで切符を買い足していこう。日本ビザに頼って前進するだけだ」

先遣隊の七人はキブツを発ち、まずカウナスへ。出国許可は、このNKVD（ソ連内務人民委員部）の事務所へ手に入った。旅費を節約するため寝台特急はやめ、各駅停車を乗り継いでモスクワに向かう。名古屋―青森間に匹敵する約千キロの距離。到着まで一週間近くかかった。

モスクワで旅行代理店を歩き回り、シベリア鉄道の切符の買い方を調べると、ルーブルで買える代理店が見つかった。申し込んだら、八日後の「三十二号」列車の席が取れた。

ソ連出国の手続きは、予想外にスムーズに済み、七人は安堵のため息をつく。しかし、不安が消えたわけではない。途中で降ろされ、酷寒の地に送られるかもしれないのだ。

列車に乗り込む前、キブツの仲間に電報を打った。「ロシアのおぼは元気になった」――。取り敢えず、シベリア鉄道には乗れることを伝える暗号だった。

## ナチの次はソ連の脅威

杉原千畝<sup>ちんぬ</sup>が出してくれた日本通過ビザを手に、やっとの思いでシベリア鉄道に乗ったユダヤ難民たち。ナチからは逃れた。が、不安は尽きない。次はソ連の脅威が待ち受けていた。

途中駅で止まるとソ連の秘密警察が乗り込んできては、難民たちから貴金属や時計を「出国まで預かる」と言って奪った。返してもらえなかった者は、だれもない。

「若い男はシベリアの強制労働に送られる」という噂<sup>うわさ</sup>も流れた。実際に、駅に着く度に何人かの男性が警官に両わきを抱えられて家畜用の列車に移され、厳寒の針葉樹林の中へ消えていった。

こうした危険から難民たちを守ろうとした、一人の男がいた。

ジョーゼフ シムキン。ポーランド生まれのユダヤ人。一九三九年、リトアニアに逃れた彼は、翌四〇年にほかの難民と同じように日本通過ビザを入手、シベリア鉄道に乗り込んだ。しかし、逃亡者としてではなく、仲間たちを安全に送り届ける案内人として。

それは、ジョーゼフが属するユダヤ人組織「ザ・ジョイント」からの指令だった。一九一四年に



1940年のシベリア鉄道



米国で創設されたこの組織は、第一次、第二次世界大戦を通じて各国で同胞の救援に奔走し、今なお旧ユーゴスラビアなどの民族紛争地域で活動を続けている。

ロシア語が話せるジョーゼフは、片道二週間の車中、秘密警察らソ連側との折衝に当たった。所持品の強奪や強制連行をしようとする警官に抗議したり、なだめたりして、何とか退散させた。

一方で、不安を訴える難民たちを励ます。切符の手配や出入国手続きも手伝った。日本領事館が閉鎖し、ビザを取れなかった難民のために、杉原の日本語のサインをゴムスタンプで複製し、ビザの偽造までした。

ウラジオストクに着くと、日本に向かう難民を見送り、再びモスクワへ。休む間もなく次の難民たちとともに、またウラジオストクへ——一年近く、往復を繰り返した。

拠点にしたモスクワのホテルには、いつも監視の目が。列車のウェイターも彼の行動を見張っている。気を抜けない日々が続いた。

ある日、シベリア鉄道の車窓の外から、地響きのようなうめき声が聞こえてきた。耳を澄ますと、ポーランド語とイディッシュ語（東欧系ユダヤ人の言語）だ。「助けて」「出してくれ」「寒い」。隣に停車した貨物列車にユダヤ人たちが閉じ込められているのだ。だが、列車はほどなく、何ごともなかったように滑り出し、うめき声は遠ざかっていった。

「自分一人ではどうにもならないのか……」。ジョーゼフは歯を食いしばった。

任務を終え、組織の助けでワルシャワに残した家族の安否を確かめた。現地の赤十字団体から返事が来た。「あなたの四人の兄と姉を含め、計二十三人の親族は、すべてナチの『死の強制収容所』へ連行された」

その瞬間、彼の頭髪は、恐怖と悲しみで一瞬のうちにすべて抜け落ちてしまった——。

ジョーゼフは四一年九月、米との開戦を目前にした日本へ逃亡した。その後いったん上海に渡り、五五年に再び来日。東京に事務所を構えて貿易業を手広く営み、晩年を異郷の地で静かに過ごした。

そして九三年八月、八十八歳の生涯を閉じた。

「つるつるの頭を主人はトレッドマークにしています。悲惨な過去には一切触れずに……」。寿美子・シムキン（四九）は東京都杉並区の自宅で亡き夫を偲びながら、そうつぶやいた。

「私にも、戦争の話は自分からはしようとしなかった。テレビで『アンネの日記』が放映されるだけでも、目をそむけていました」

横浜市の観光名所、外人墓地にあるジョーゼフの墓。傍らには、日本語で書かれた小さな石碑が立つ。

「第二次世界大戦中ナチス・ドイツに追われた多数のユダヤ人難民を命をかけて救出し、自らも杉原千畝リトアニア副領事（領事代理）の発行した命のビザで日本に脱出し救われた同胞の勇士ジョーゼフ・シムキン氏は、よみがえりし時を信じ安らかにここに眠る」



ジョーゼフさん（1941年撮影）が眠る墓。彼の行動を称える碑が手前に。横浜市中区の外人墓地で





## 偶然が母子を救った

列車がプラットホームを離れ始めた。やっと乗ることができたシベリア鉄道の客室で、母子は一息ついた。疲れ切った体が、速度を増す車両の動きで小刻みに揺れた。

一九四一年二月末ごろ。母ゼルダ パーンスティン三十二歳。一人娘のマーシャ九歳。モスクワの街並みが車窓を流れ、遠ざかっていった。モスクワまでの苦難を拭い去るように。

ナチがポーランドに侵攻してきた三九年九月、マーシャの父モデハイ||当時三十五歳||は、事情があつて母子二人を残し、一足先に首都ワルシャワを離れた。いずれ、故郷のソ連領ビテンで落ち合うはずだった。

その後ワルシャワを逃れたマーシャたちを、ナチの恐怖がすぐに襲った。

深夜、案内の農民に連れられ、小さな村に着いた。しかし、そこはドイツ軍部隊の真ただ中だった。案内人にだまされたのだ。ドイツ兵はユダヤ人たちを柵に向かって整列させた。年寄り、女性、子供が多かった。「きようは奇数だ」との気まぐれの指示の後、容赦ない銃声が響き渡った。一三、五……と、運悪く端から奇数の順番に並んでいた人たちがぐずおれた。ゼルダもマーシャも、たまたま偶数番だった。暗闇にまぎれて必死で逃げた。

二人は東を目指した。着の身着のまま。持ち物といったらマッチと塩、針、糸、わずかな所持金だけだった。

何日歩いただろうか。冬が近づいていた。母は娘に「ロシア人に捕まったら、泣き出すのよ。ナチよりはまだ温かい心を持つているから」と教えていた。

広大な野の向こうに森が見えた。そこから先はソ連領だ。

恐れていたことが現実になった。苦勞してソ連領内に入った途端、一人の若いソ連兵に捕まったのだ。「ドイツ側へ戻れ。戻らなければ撃つ」

ゼルダは必死に言い返した。「もう戻れない。ドイツ人に殺されるぐらいならロシア人に撃たれた方がまし」。マーシャは教えられていた通り泣き出した。だが、ソ連兵は動じない。

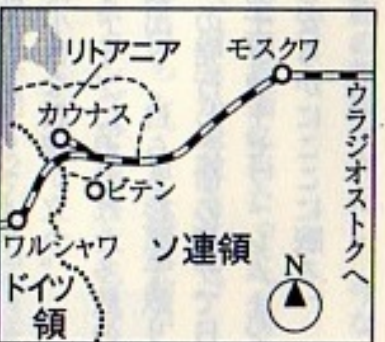
諦めかけたゼルダが「マーシャ、もう泣くのはおやめ」とささやいた。ソ連兵が一瞬首をかしげ「マーシャだつて?」と口を挟んだ。「ポーランド人はいつからロシアの名前を付けるようになったんだ」

ゼルダははつとして、マーシャの名はチェーホフやドストエフスキーの作品の中から採ったのだと説明した。ロシア文学を褒め称え、男の表情を探った。

しかし、若い兵隊はロシア文学には何の興味も示さなかった。その代わりに、ブロンドのおさげ髪のマーシャをまじまじと見つめて言った。「マーシャってのは、おれの大切



父親と同じ職業を継いだマーシャさん。一九九四年米日、岐阜県・八百津町の「人道の丘」も訪ねた。ニューヨークのホテルで





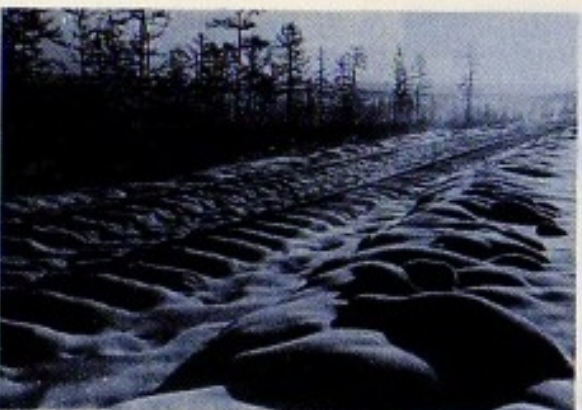
な妹と同じ名前だ」

兵隊は母子にパンをくれた。近くの町まで軍のトラックで送ってもらった。凍てつく荒野をシベリア鉄道はどこまでも東に走り続けていた。これまでの波乱に満ちた逃避行の情景が母子の脳裏を駆け巡った。

偶数というだけで射殺を免れた幸運。ソ連兵の妹の名前との偶然の一致。故郷ピテンでモデハイと合流できた喜び。そして、その後の落胆。四〇年八月に入ってモデハイはリトアニアでソ連の秘密警察に逮捕、抑留されてしまった。十七日には、ゼルダが日本領事代理の杉原千畝からビザをもらえたというのに――。

米ニューヨーク。セントラルパークに近いホテルのレストランで、六十三歳のマーシャは若々しかった。現役のジャーナリストとして走り回る毎日。「スギハラのためなら」と、分刻みの日程を割いてくれた。「いつもぎりぎりの逃避行でした。横浜から乗った船も、米国行き最後の便でした。日本が戦争に突入する前のね」

生死の境を間一髪で切り抜け続けてきた母子。母ゼルダは五〇年、米国に入国できずアルゼンチンにいた夫モデハイの元へ。既に結婚していた娘マーシャが、米国定住を許された父と感激の再会をしたのは五九年だった。その七年後、他界したモデハイ。父の仕事もジャーナリストだった。



雪の中、どこまでも線路が延びる冬のシベリア鉄道1978年2月撮影

## もう一人いた「スギハラ」

若者は、ホテルの部屋にトランクを置くや否や、外へ飛び出した。雪の大通りの風景も視界に入らない。ただ思い詰めた表情で足早に歩き続けた。

一九四一年一月初め。ソ連の東の果ての港町、ウラジオストク。二十二歳の彼、ルドウィック・クライナーは自問自答を繰り返していた。「もし、ここでもビザが出なかったら……死刑か終身刑の宣告と同じだ」。目指す建物が近づいてくる。日本総領事館だった。



ルドウィックはポーランドのユダヤ人学生で、単身リトアニアに脱出。四〇年八月、首都カウナスの日本領事館が通過ビザを発給するという情報を耳にした。領事館を訪れると、ビザはすぐに出た。応対した人物が杉原千畝だったかは記憶にない。だが「奇跡のようだ。後はソ連の出国許可さえ手に入れば」とほっとした矢先、とんでもないことが起きた。通過ビザが書き込まれたパスポートを紛失してしまったのだ。

パスポートは赤十字が再発行してくれた。オランダ領キュラソー島の「上陸ビザ」も、精巧な偽造品を入手した。だが、カウナスの日本領事館は閉鎖された後だった。仲間は「モスクワの日本大



使館に行け」と助言した。

出国許可は、電報局に勤める友人が作ってくれた「通過ビザはモスクワの日本大使館にあり」というニセ電報を見せて手に入れ、モスクワへ。しかし、大使館はにべもなかった。「ビザは出せない」もうウラジオストクにすべてを賭けるしかなかった。シベリア鉄道の十日間は、募る不安に食事ものを通らなかつた。長い旅だった。

やっとたどり着いた日本総領事館。総領事代理の根井三郎が出てきた。無論、ルドウィックは名前など知らない。「ビザを」と頼み込むと、根井は困惑顔で聞いた。「モスクワへは行きましたか」「行ったが、駄目でした」「ベルリンは」「殺されに行くようなものです」

根井は言った。「この仕事は漁業許可が中心です。通過ビザを出すと、越権行為になるんですよ」それでもルドウィックは必死に食い下がる。「カウナスでは出してくれました」。根井がようやくうなずいた。「分かりました」。ビザは出た。

ルドウィックは言葉が出なかつた。体を震わせ、三分も四分も立ち尽くし、やっと「ありがとう」とだけ言った。動揺ぶりを心配したのか、根井は彼をホテルまでそりで送った。

根井ビザを手にしたルドウィックは日本に入り、その後カナダを経て英国に落ち着いた。今、七十六歳になり、ロンドンの閑静な住宅街で暮らす。

「スギハラはビザをもらった時は感激した。でも、ウラジオストクでは、その何倍も感激した」。そう振り返るルドウィックは、記者から発給者の名前を知らされると窓に視線をやり、つぶやいた。「ミスターネイ、ミスターネイ……彼はまだ生きているのだろうか」

根井三郎は戦後、法務省に移り、名古屋入国管理事務所（現・管理局）の所長を最後に引退。九



ウラジオストクの総領事代理だった  
根井三郎氏



杉原ビザをなくしたが、ウラジオストクで日本通過ビザを受けたルドウィックさんは逃亡当時



二年に九十歳で亡くなっていた。ウラジオストク時代の四一年三月、外務省との間でやり取りした電報が外交史料館に残っている。

「モスクワの大使館以外は、避難民に通過ビザを与えないように」と、外務省は在欧、在ソ公館に至急電を送ったが、根井は返電した。「避難民がモスクワまで引き返すのは不可能。その事情を考えれば、ウラジオでも従来通り通過ビザを発給するのが妥当」と。

根井は、外務省留学生として杉原の二期後輩にあたる。中国・ハルビンにあったロシア語の専門校ハルビン学院の同窓でもあり、杉原とはいわば旧知の間柄。リトアニアで杉原が難民に大量のビザを発給したことも知っていた。

杉原の妻幸子は数年前、根井と偶然出会った。最初で最後の会話となったが、彼はぼつんと言ったという。「杉原さんがビザを出したというのに、私たちが駄目だという理由はありませんよ」

ルドウィックは、杉原に二度助けられたのかもしれない。



# ツルガの町が天国に見えた

極東の港は、厚い氷に閉ざされていた。一九四〇年暮れから四一年にかけての厳しい冬。シベリア鉄道九千キロの旅を終えたユダヤ難民たちは、ウラジオストクでしばしば足止めをくらった。目指す日本の敦賀行き定期連絡船が欠航になるからだ。

待ちわびた出航が決まるや、ほかの乗客と競うように乗り込んだ。船室は超満員で、身動きもままならない。「寒くても外の方がまし」と、彼らは甲板上に上がり始めた。

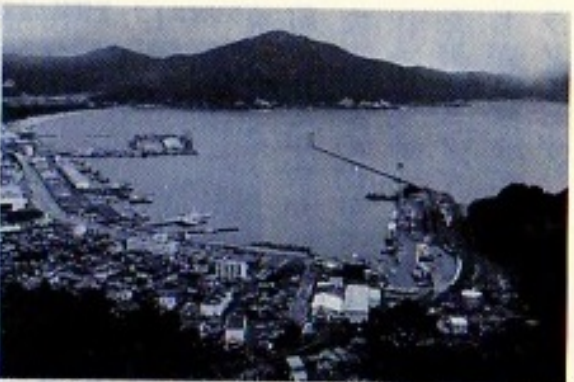
次第に港が小さくなる。船の横をソ連船が伴走している。領海内での航行を監視するためだ。やがて、ソ連船がきびすを返した。公海上に出たのだ。その瞬間、歓声が上がった。

「これで自由なんだ!」。飛び上がる若者、抱き合う親子、手を取ってダンスを踊る男女。そして、だからともなく歌が始まった。ヘブライ語の唱歌「ハティクバ」(希望)。いつしか、甲板での大合唱になった。

「心の底で懐かしむ はるか東のシオン(エルサレムの丘)

希望は今も捨てない 二千年来の希望……」

ナチから逃れ、ソ連をくぐり抜けたユダヤ難民たち。通過ビザを出してくれた杉原千畝の国、日本はもう目の前だ。



ユダヤ難民がたどり着いた敦賀の港。初めて見るニッポンだった。1995年1月撮影(左)。  
入国拒否され日本海を漂流したベンジヤミンさん(右)ニユーヨークで(右)



四一年三月十三日。天草丸(二、三四四トン)に乗ったベンジヤミン。フィッシュヨフら七十二人の難民たちも、「希望」の地に胸を膨らませていた。荒波にもまれ、船酔いに苦しめられたことも忘れて。天草丸は滑るように敦賀港に入った。

入国審査のため、福井県警察部の警官が船に乗り込んできた。しかし、パスポートを調べると、彼らは冷たく言った。「最終目的国のビザがない者は日本入国を認めない」

七十二人は、ビザが不要なオランダ領キュラソー島に向かうことを証明する「キュラソービザ」を持っていなかった。欧州脱出にそれが必要だと知るのが遅れ、四〇年八月下旬にリトアニアのオランダ領事館へ走ったものの、既に閉鎖。日本領事館には辛うじて間に合い、杉原はすぐに日本通過ビザを出してくれたのだが。

「必要なビザは日本で取りま

す」。必死の訴えも空しく、下船は許されない。彼らを出迎えに来ていた神戸ユダヤ人協会のスタッフは、救済策を講じるため急ぎよ神戸に戻った。

「リトアニアの日本領事館はビザをくれたのに、なぜ同じ日本が



ウラジオストク-敦賀間の定期連絡船「天草丸」



……」。悔しがるベンジャミンたちを乗せたまま、天草丸は三日後に敦賀を離れた。

再び厳寒のウラジオストクへ。しかし、ここでもソ連秘密警察の怒号が待っていただけだった。「なぜ戻った。お前たち、日本のスパイだな」。船から一步も出ないよう命じられた。「日本にも行けず、一生、船にいろと言うのか。それとも、逮捕されてシベリアで強制労働……」。ベンジャミンは、混み合う船室の片隅で身震いした。

日本入国のめどもないまま、天草丸は再度、ウラジオストクを出港した。眠れぬ二晩を明かした二十三日。ベンジャミンは、次第に近づく敦賀の町並みを甲板から茫然と眺めていた。「凍えるような川を泳いでポーランド国境を越え、仲良くなつたソ連兵の助けで何とかシベリア鉄道の切符も買えたのに。おれの運もついに尽きたのか」

ふと見ると、岸壁に甲板に向かって叫ぶ人がいる。目を凝らすと、最初の入港の時に迎えに来た神戸ユダヤ人協会のスタッフだ。「おい、上陸できるみたいだぞ」と、だれかが叫んだ。難民たちが、次々に甲板に上がってくる。笑顔が弾けた。協会が、駐日オランダ大使館に交渉して「キュラソービザ」を出してもらったのだ。

「あの瞬間、ツルガの町が天国に見えましたよ」。現在は米ニューヨークで小さな会社を営む七十二歳のベンジャミンは、そう振り返る。

十三日間にわたって日本海をさまよった末、ようやく七十二人の難民は、春まだ浅い日本の土を踏んだ。

## 布団の温もりに安堵の一夜

敦賀は小さな港だった。日本海の荒波にもみくちゃにされて、難民たちはへばっていた。二十歳だったツピカハナ（現在エルサレム在住）が、神学校仲間とこの福井県の港に着いたのは一九四一年の早い時期。日本はまだ冬だった。



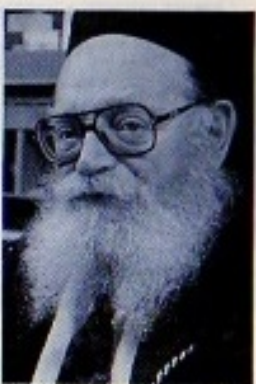
湾に入ると、途端に波が静かになった。三方に山が迫ってくる。平和なら、訪れることはおろか、思い浮かべることすらなかった東洋の国ニッポン。だれかが叫んだ。「見ろよ、美しい島だ」

着岸前の船内では入国審査の係官が、旅券や所持金の確認に追いまくられ、汗だくで叫んでいた。ユダヤ人たちの持ち物ははしれていたが、旅券の不備や所持金不足が目立ったのだ。

長い入国審査を終えてやっと船を降りたツピたちは、すぐそばの鉄道駅に向かった。十六、七歳の日本人の少年が近づいて来た。リンゴやミカンなど果物がいっぱい入ったかごを抱えている。それを差し出し、しぐさで「どうぞ」と促した。代金を払おうとすると、しっかりした顔つきの少年は「ノー」と拒んだ。

果物をだれも取ろうとしないので、少年は一瞬困った表情を見せ、足元にかごを置いて走り去った。後ろ姿を目で追いながら「どうということなんだ」とツピは戸惑った。少年が見えなくなつて、





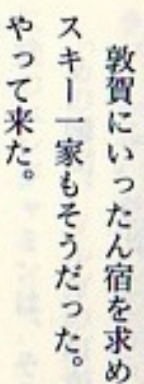
「あのリンゴの味は忘れられない」と語るツビさん（エルサレムの自宅で）  
思い出を語るジャンさん（ニューヨークの自宅で）

仲間たちとリンゴをそつとほおぼった。戸惑いが消え、甘酸っぱさが広がった。ツビが初めて口にした日本の味だった。

ソ連のウラジオストクからの連絡船はこのころ、いつも客であふれ返っていた。ピークの二、三月には一カ月で千人近くの外国人が敦賀の土を踏んだ。「ユダヤ人の部隊けふ（きょう）また敦賀に上陸」。当時の新聞には、こんな見出しが躍った。

難民が到着する度に敦賀駅も混雑した。港に着いた難民たちが、敦賀駅から乗車し、そのまま敦賀駅へ。そこで乗り換え、神戸へと直行したからだ。待合室は身動きがとれないほどになり、案内係の声がかん高く響いた。英語で書いた案内を急ぎよ窓口に用意した。「お金が乏しくて敦賀駅までトボトボ歩いたユダヤ人もいた」と、当時十四歳だった井上脩（六八）——敦賀市教育史編纂室——は言う。

小さな家々や雪に覆われた山並み。幾つものトンネル。敦賀を出た車窓からツビの目に飛び込む景色は穏やかで、新鮮だった。



敦賀にいったん宿を求めた人たちもいる。ポーランド第二の都市ロツジから逃げてきたクラカウスキー一家もそうだった。父母と当時十歳のジャン、二歳のエリザベスの四人。彼らも寒い季節にやって来た。

ジャンたちを乗せた船は予定より遅れ、下船は夜になった。汽車の時間はとうに過ぎていた。仕方なく歩いて行くと、にぎやかな通りに出た。泊めてくれる所が見つかった。

着飾った女がたくさんいた。男たちも出入りしていた。遊郭だったのだ。畳の部屋には、火鉢が一つあるだけだった。でも、ぜいたくは言えなかった。生と死がつねに紙一重だった日々を思えば、雪が深い四〇年二月、ソ連領からリトアニアへの国境越えを一家は試みた。だが、失敗。ソ連兵に見つかり収容所に入れられた。

人びとは、時がくると順々に貨物列車に乗せられ、シベリアに送られているようだった。食べ物も暖房もない車内で大勢が死んだという噂を聞いた。

数週間後。とうとう選別の列に並ばされた。シベリア送りか否か。明暗が分かれてゆく。赤ん坊のエリザベスは、何日前か、ネズミにかじられたのがもとで病気になる容体は深刻だった。その時も、ぐったりし、息苦しそうだ。ソ連兵は、どうせ赤ん坊は死んでしまおうとでも判断したのだろうか。突き放すように言った。

「あんたたちはソ連が嫌いなんだね。リトアニアへ行っちゃいな」  
米ニューヨークのイーストリバーを見下ろす高層マンションの十五階に、ジャン・クラカウスキー（六四）の住まいはあった。「あの時は、赤ん坊の妹エリザベスが救ってくれたと思ってているんだ」

——日本に着いた夜、敦賀の宿は一晩中、にぎやかだった。部屋の外でくすくす笑う声が聞こえた。それでも、畳の上の布団の温もりがうれしかった。国境で一家の「守り神」となったエリザベスが、小さな寝息をたてていた。



昭和8、9年ごろの敦賀駅